

日本史の
エクリチュール

大隅和雄

目次

はじめに	7
第一章 神々と歴史	17
一 神々の世	17
神代と人皇の代／神世のあり方／無時間の世界	
二 日本史の特質	25
固有の神々の君臨／天皇の系譜／藤原氏の立場	
三 歴史を動かすもの	33
権化の人／縁起と歴史／神仏と歴史	
第二章 国家の記録	43
一 官撰の歴史	43
六国史の編纂／実録的な性格／国史の形式	
二 国史の書き方	51
漢文の実録／記述者の立場／人物の評価	
三 国史の伝統	60
国史の解体／国史書き継ぎの努力／公的な歴史の系譜	
第三章 歴史の物語	69
一 世継の翁	69
歴史を語る場／歴史の語り手／歴史の聞き手	
二 物語の形式	77
物語の成立／現場にいた人／関心の範囲	
三 歴史の物語の周辺	85
語り手の性格／歴史の背後／倫理道德の規範	
第四章 説話の集成	91
一 歴史の周縁	91
歴史と説話／舞台の上と外／舞台の裏と下の話	
二 断片の集積	100
説話への関心／説話の蒐集／説話集の読まれ方	
三 象徴と典型	109

歴史の名場面／典型的な人物／歴史の表現

第五章 合戦の物語

- 一 合戦と歴史……………115
- 内乱と歴史／合戦の記録／軍記の成立……………115
- 二 歴史と語り……………123
- 情報の伝達／語り手と聞き手／軍記と説話……………123
- 三 合戦への視点……………131
- 見立ての叙述／無常観と歴史／軍記の系譜……………131

第六章 家と個人の経歴

- 一 家の歴史……………139
- 先祖の事績／先祖と歴史／家の栄枯……………139
- 二 伝記……………147
- 生涯の総括／僧伝の集成／人物史と歴史……………147
- 三 自叙伝……………155
- 個人の日記／自撰の年譜／自叙伝と歴史……………155

第七章 史書と史論の伝統

- 一 歴史の流れと時間……………163
- 世の移り変わり／末法思想と歴史／道理の推移……………163
- 二 歴史への視点……………172
- 神皇の系譜／乱世の統一者／歴史の大観……………172
- 三 歴史を書く立場……………180
- 貴族と武士／中央と地方／国家の歴史……………180

あとがき……………187

参考文献……………190

解説（王小林）……………193

Sample

はじめに

トルストイの後期の作品に、『木の皮屋根のついた蜜蜂の巣の異なった二つの歴史』という短編がある。木の皮の屋根のついた巣に住む蜂が、自分たちの巣の歴史を書くという話で、蜂たちの間における立場の相違から、二種類の歴史が書かれることになる経緯が述べられており、簡潔な小品ではあるがなかなか深い意味が込められた作品である。

二つの歴史のうちまず第一のものは、雄蜂の史料編纂官ブルーブルーによって編纂されたが、それはつぎのような内容からなっていた。

著名なる雄蜂たちの手記。雄蜂の兄デーベ殿下とその弟クークー閣下と

の往復書簡。

宮内式部官報。雄蜂の口碑伝説。歌謡、ロマンス。雄蜂と蜜蜂相互間の刑事及び民事事件。他の巣よりするかぶと虫、ぶよ、雄蜂らの旅行記。巢の各時期における蜜の量に関する統計的報告。(中村白葉訳)

雄蜂たちの中から選ばれた史料編纂官は、精力的に仕事を進め、蜂の巣の歴史を編纂して行くが、その歴史は、蜂の巣が分裂して新しい巣が出現する六月初めの頃から書きはじめられた。そこでは、もとの巣から分かれた新しい巣が、正しい秩序のもとに発展して富を蓄え、力を誇るようになり、他の巣を圧倒して行くさまを明らかにすることが、木の皮屋根のついた蜂の巣の歴史であると考えられていたわけである。

ところが、雄蜂たちの歴史編纂の仕事が進む中で、多くの働き蜂たちは、その歴史とは違う別のことがらを、自分たちの巣の歴史として思い描きはじめる。六月初めの新しい巣の分出ぶんしゅつよりもずっと前、雪解けのなかで早春の花々が咲き

はじめると同時に、蜜蜂の活動ははじまっていた。したがって、働き蜂たちが考えた蜂の巣の歴史は、雄蜂たちが重視する分蜂というできごととはかかわりなく、早春にはじまり、春から夏へ、夏から秋へ、そして冬へと大自然の推移とともに、生まれ、栄え、うつろって行く働き蜂の営みを中心にして書き進められるわけで、それは、雄蜂たちが編纂する権力と支配の歴史とは異なった、もう一つの蜂の巣の歴史であった。

トルストイが、『戦争と平和』の中でナポレオンに占領されたモスクワを女王蜂が去って終焉を迎えようとしている蜜蜂の巣に譬えながら描いている部分は、戦争によって荒廃してゆくロシアの都の姿を鮮やかに描き出したものとして有名な一節であるが、この短編も、鋭い観察に基づいてとらえられた蜜蜂の生活に譬えながら、歴史というものの性格をとらえ、簡潔に描き出したものとして、優れた文章であり、働き蜂たちの主張には、晩年のトルストイが、ロシアの社会を深く見つめ、やがて起こる革命を予見していたことを思わせるものがある。

雄蜂の史料編纂官が、精力的に蒐集した多彩な史料によって浮かび上がらせようとしたものは、まさしく木の皮屋根のついた蜜蜂の巣の歴史であったが、働き蜂たちが描こうとしたのも、木の皮屋根のついた蜜蜂の巣で生きぬいた蜂の歴史である。

小さな蜂の巣の歴史でも、それを書こうとすれば、さまざまとらえ方がある。何世紀にもわたる人間社会の歴史を書こうとすれば、その見方、とらえ方、書き方が、さまざまにあることはいうまでもない。しかし、歴史を見るという場合に、何を歴史として見るかを考えれば、それが、自然を観察したり、美術館で絵画や彫刻を見たりするように、簡単には行かないことに気がつくであろう。もつとも、自然といっても何を自然として観察するのか、美術館に並べられているものがなぜ美術的なものなのかと考えれば、同じような問題は出てくるが、歴史の場合には、自然や美術品にくらべて実体のあり方が複雑であることはたしかである。

世間で、歴史観ということばはよく用いられているが、それは対象としての歴史が人々の前に実体として在り、人々がそれぞれの立場でその歴史を観るというような簡単なものではない。観る対象としての歴史は、その時代までに考えられ、書かれてきた歴史であり、そこに無制限の多様性があり、自由な選択が可能なのわけではない。言い換えれば、歴史というものは、それを考え、書いてきた民族なり、社会なりの文化そのものであって、それぞれが個人的な立場で歴史を観るとはいつても、観ている歴史自体、長い間語り伝えられ、書かれてきた歴史が、幾重にも複雑に重なり合っつてつくられているというところを見落すわけには行かないであろう。

歴史は過去のさまざまな事実を確かめ、その推移を叙述したものであるが、それはことばで語られ、文字で記述されたものとして受け継がれてきた。現代では、科学技術を駆使して、ことばや文字のみに頼るのではなく、過去のさまざまな遺物や遺跡からも、多方面の情報を引き出すことができるようになった。歴史を見る場合の対象として、実体として在る部分が、今後徐々に豊かになって行くに違いない。また、ことばと文字のみに頼るのではなく、映像や音響な

どの持つ表現力を総合して、過去の人間の生活や社会を浮かび上がらせ、人々に伝える方法が考えられ、それも今後次第に発展し、豊かになって行くであろう。しかし、それは二十一世紀の歴史学のこと、人間が文字を持つようになって以来、何十世紀にわたって、歴史というものは、文字で書き続けられ、文字を通じて考えられてきた。

歴史の記述の仕方はさまざま、そこに歴史固有の形式があるわけではない。それは神話や帝王の系図をはじめ、追悼や記念の文、法律の沿革の説明や裁判の記録などの形を借りることも多く、叙事詩や劇、物語や説話、評論や小説の形式で綴られることもある。近代になって歴史学が成立し、過去の事実を明らかにするために、厳密な手続きが必要とされるようになると、歴史の研究によって明らかにされた史実を客観的に述べることに、歴史叙述の主眼が置かれるようになったが、事実を明らかにする論証の過程を記述することや、客観的な中正を装う教科書の、無味乾燥な書き方だけが正統な歴史叙述であるわけではなく、まして歴史学の難解な研究論文が、歴史を書ききったものとして広く

認められているわけではない。

日本人は六、七世紀になって、中国・朝鮮の文化的・政治的な影響のもとで、自分の国の歴史というものを強く意識しはじめ、歴史の編纂を企てるようになったが、その時、日本の歴史はどのような形で考えられたのであろうか。それよりさき、『宋書東夷伝』の「倭王武の上表文」に見える、

昔より袒褌躬ら甲冑を環き、山川を跋涉して、寧虺違あらず、東、毛人を征すること五十五国、西、衆夷を服すること六十六国、渡りて海北を平ぐるること九十五国……

という文章は、現在私たちが見ることのできる、最古の日本歴史の記述と比べてよいが、中国や朝鮮の国々に対して自分の国、つまり倭の国の歴史を誇った王は、日本の国を治めて行くためにも、歴史を書き記すことをはじめていた。上祖の意富比埜から乎獲居にいたる八代の系譜を刻んだ「稻荷山鉄剣」

の銘文をはじめとする金石文は、そうした早い時代に生まれた歴史記述の例であらう。

漢字を学び、用いることができるようになった日本人は、どのような書き方で、自分の国の歴史を書いてきたのであろうか。日本人が、自分たちの歴史を書こうとした時、何を記述の中心に据えて歴史をとらえ、どのような文体と形式を選んできたかを考えることは、日本の文化について考える上で、極めて重要な問題の一つであると思われる。

八世紀に『古事記』『日本書紀』がまとめられて以来、日本人が書き残し、多くの人々によって読み継がれてきた日本の歴史は、膨大な巻数に及んでいる。一つ一つの歴史書は、それを書いた人々の歴史に対するぬきさしならぬ関心に支えられているが、それらに歴史書として形を整えさせた伝承や史料がどのようなものであったかを考え、背後に幾重にも重なっている歴史の見方を、掘り起こしてみると、それが語りかけてくるものは限りなく広がって行く。

しかも、ここで一つ一つの歴史書についてではなく、改めて日本歴史の書き

方、書かれ方一般について考えようとすると、問題は多方面に広がり、論点を簡明に整理し、問題のありかを指摘することは容易ではないといわざるをえない。以下に述べたことは、日本歴史の書かれ方に関する極めて拙い私なりのノートであるが、編集部から与えられたこの小冊子の表題について考えるための、糸口の一つになれば、望外の幸せである。

Sample

あとがき

乱開発ともいべき土地利用の急激な進展の中で、過去の人間生活のありさまを伝える遺物がつぎつぎに発掘され、新聞やテレビがそれを報道する。新聞には刺激的な見出しをつけた考古学の記事が氾濫しているが、一般の読者の間では、断片的な記事の多くは時を置かずに忘れられ、新発見として紙面を飾ったことが、歴史の書き方をどう変えたのかを追跡する人は稀である。

資料の調査と歴史の研究が、現代ほど盛んであった時代はかつてなかったと言えそうであるが、歴史の書き方についての議論が、現代ほど低調だった時代もかつてなかったのではないかと思う。

歴史の書き方について考えるとすれば、多岐にわたる困難な問題に直面しな

ければならないであろう。ここでは、その中で、古代以来の日本人がどのような形で歴史を書いてきたかを概観し、そういう歴史を読んできた人々が、歴史についてどういう考え方をしてきたかを考えてみようとした。

ところが、その中の小さな問題でも、それを考えようとすれば、広汎な問題と繋がっており、論点を明確にし、十分に深めることは容易でなく、編集部から与えられた責を果たすことができなかつた。筆者の非力を恥じるのみであるが、ここでとりあげられなかつた近世・近代の歴史書の問題も含めて、他日を期したいと考えている。

一九八七年五月三日

大隅和雄

追記

本書は、弘文堂から出版された「シリーズにつぼん草子」の一冊として書かれた。小冊子であったために、近代の「日本史」について触れることができなかつた。なお、本書の復刊にあたっては、弘文堂の快い了承を得た。記して感謝申し上げる。



参考文献

- 史学会編『本邦史学史論叢』（上・下）富山房、一九三九年
歴史学研究会・日本史研究会編『日本史学史』（日本歴史講座 8）東京大学出版会、
一九五七年
- 日本思想史研究会編『日本における歴史思想の展開』至文堂、一九六一年
丸山真男編『歴史思想集』（日本の思想 6）筑摩書房、一九七二年
井上光貞編『日本書紀』（日本の名著 1）中央公論社、一九七一年
桑原武夫編『新井白石』（日本の名著 15）中央公論社、一九六九年
坂本太郎『日本の修史と史学』（日本歴史新書 42）至文堂、一九五八年
坂本太郎『六国史』吉川弘文館、一九七〇年
坂本太郎『史書を読む』中央公論社、一九八一年
山中 裕『歴史物語成立序説——源氏物語・榮花物語を中心として』東京大学出

版会、一九六二年

日本文学研究資料刊行会編『歴史物語 1』（日本文学研究資料叢書）有精堂出版、

一九七一年

日本文学研究資料刊行会編『説話文学』（日本文学研究資料叢書）有精堂出版、

一九七二年

小峯和明編『今昔物語集と宇治拾遺物語——説話と文体』（日本文学研究資料新集

6）有精堂出版、一九八六年

日本文学研究資料刊行会編『平家物語』（日本文学研究資料叢書）有精堂出版、

一九六九年

古典遺産の会編『室町軍記総覧』明治書院、一九八五年

尾藤正英「日本における歴史意識の発展」『岩波講座日本歴史 22』岩波書店、

一九六三年

我妻建治『神皇正統記論考』吉川弘文館、一九八一年

大隅和雄『愚管抄を読む——日本中世の歴史観』平凡社、一九八六年

ピーター・ゲイ（鈴木利章訳）『歴史の文体』ミネルヴァ書房、一九七七年

解説

王小林

本書の著者は、日本史の鬱蒼とした森を長年探検してきた経験から、うかつに踏み込めば迷いがちな読者に、鳥瞰する目によってもたらされる二つの視点——日本史における神話と歴史の関係と記述様式の多様性という、鮮やかな道しるべを示してくれる。

「エクリチュール」という語は、無論、たんに「書く」ことではない。それは、構造主義以後のヨーロッパの前衛的思想家たちが付与した衝撃的な意味——人は存在するという、まさにそのことによって「書かざる」——を持つ（井筒俊彦『意味の深みへ』岩波文庫、二〇一九年）。本書の著者も、日本史を、無数の人によって「書き込み」「書き出された」歴史の世界として捉える。

例えば、七二二年に成立した『古事記』と七二〇年に成立した『日本書紀』は、

体裁が異なるにもかかわらず、「記紀神話」という天地開闢の神話を含む「神世」を歴史の始まりに置く点で一致する。これは、東アジアにおいて文明の進んでいた中国で編纂された正史と称せられるものには見られない現象である。当時、歴史書ならば隣の中国から漏れなく輸入したことは、九世紀末に編まれた『日本国見在書目録』を見ればわかる。にもかかわらず、なぜ「神世」という「無時間の世界」が、日本史の出発点を象徴するこの二つの史書に取り込まれたのかは、ひとつの謎であった。歴史学上のみならず、思想史の上でも重要なこの現象について、著者はひとまず、「なぜ日本人が歴史の冒頭に神話を据えてきたか」と問うた上で、

歴史というものは、世の中の移り変わりを記録することによって成り立つ。しかし、人間は、世の中の移り変わりを見つけながら、その中に変わらぬものを見出そうとするものでもある。国家の変わらぬ秩序を明らかにするために、政府は歴史を編纂しようとするが、中国や朝鮮半島の国々に対して日本という国の特質を主張するために、『古事記』『日本書紀』が編纂された時、日本の歴史を一貫して流れている、変わらないものとして第一に掲げられたのは、天皇のあり方であった。そして移り変わる歴史の中であって、一貫して変わらぬものは、神世に定められたからこそ歴史を超えたものであると考えられたのである。

る。

(本書31―32頁)

という鋭い観察を示している。日本史には、その始まりにおいて、「歴史を超えたもの」が、なんとも必要だったのである。

記紀神話をただ「ありのままの事実」として堅く信じていた本居宣長の時代から二世紀半以上経つものの、この「歴史を超えたもの」を取り入れたことの意義は、まだ近代的学問による検討が十分なされていない。つい最近でも、やはり「道案内」の形で次のように紹介されている。

神々の物語に登場する天照大神の子孫として天皇家が登場し、人々の世界もその一続きの歴史の延長線上にある。内容のみに関するかぎり、この二つを決定的に分けるのは神武天皇による全国平定事業と「帝位」(『日本書紀』による表現)への就任なのである。その背景となっている時間の流れは、「神代」から、天照大神の子孫の系譜にそって、一つながりになっている。それはすべて、いまも人々が生活している、この現実界の内の出来事として語られているのであり、その意味では「神代」の物語もやはり歴史の一部である。

(荻部直『日本思想史への道案内』NTT出版、二〇一七年)

ここでは、記紀神話はもっぱら自然に導入されたものとして、「現実界の内の出来事」「歴史の一部」とされているが、四十年近く前に書かれた本書は、すでに右記のごとき記紀神話理解を明確に否定している。

天皇の系譜は、それを遡って行けば発端は無時間の世界である神世に接している。しかし、それは、無時間の世界と歴史の世界とが、時の流れとしてひと続きに繋がっているということを言おうとしたものではなかった。

(本書30頁)

かくして著者は、記紀神話において「神世」と人々の世界が一体となっているのは、その本来の目的ではない、と明言する。その上で、

神話を冒頭に掲げて歴史を述べる『日本書紀』と『古事記』を、最古の史書として持つ日本では、歴史というものは、高天原の最貴の神の子孫である歴代天皇の系譜を語るものと考えられた。そこで起居注をもとにした天子の行動の記録を歴史の柱にするという中国の歴史の書き方が、歴代天皇の皇位継承の経

緯を語ることに歴史であるという神話の伝統を引く考えに、重ね合わせて理解されることになった。天子の起居と、その結果の中に天の意志があらわれているという思想は、連綿とした天皇の系譜の中に、天照大神の神意を見ようとす
る思想に重ねて受け入れられた。
(本書55頁)

というように、記紀神話の機能について、歴史学と政治学からその趣旨を解き明かす。

換言すれば、中国と日本は、それぞれまったく違う「天下」であり、圧倒的に優勢だった中国の「天下」と区別するために、日本では「無時間の世界である神世」が歴史書に取り込まれた。二十四史の伝統に規範を持つ「中国や朝鮮半島の国々」の歴史書とは異なり、「神世」は、まさにその「歴史を超えた」無時間性によって、その後の日本史の、様々な「エクリチュール」を可能にした。つまり、日本史にとって、「天地初発の時、高天原に成る神の名云々」と始まる『古事記』の記述方式は、中国の正史からも、中国中心の「天下システム」からも独立した、独自の時間の始まりの宣言を意味する。

古代の日本人にとって、「神世」を歴史に導入するということには、かくも重大な意義があったのである。

かかる著者の論点は、本書第三章以降の、日本史の様々な叙述様式についての考察に連結する。平明な語り口によって、漢字のみで書かれる中国の歴史書とは異なる、変体漢文、純漢文、和漢混清文、仮名文など、様々な文体の歴史書が紹介され、仏教思想や神道思想などを盛られた世継の翁、説話、物語、軍記、伝記、自叙伝も、日本に生まれた独自の特色に富む歴史書として、明晰な筆致で素描されている。そして、本書を締めくくる言葉として、著者は、「中央の歴史に対して、地方の歴史が書かれなかったように、国の歴史に対して、貴族、武士、庶民の歴史を書こうとした例は驚くほど乏しい。わずかに僧の歴史があるに過ぎない」と、日本史全体に認められる国家偏重の傾向への批判も忘れない。そこには「ミステイシズム」だけでは満足しない、「進歩としての歴史」(E・H・カー/清水幾太郎訳『歴史とは何か』岩波新書、一九六二年)に寄せる著者の熱き思いも感じられる。

無論、本書は日本史を学ぼうとする初心者への入門書ということもあって、著者の浩瀚な学識の僅か一斑を窺わせてくれてに過ぎない。これによって惹き起こされる大隅史学への好奇心を満たすには、著者によるその他数々の名著を読むことが近道であり、なかでも本書の理論に深く関わる『愚管抄を読む——中世日本の歴史観』(講談社学術文庫、一九九九年)を手にとれば、その巨視と微視の目を併せもった日本史探検の方法に、たちまち魅了されてしまうだろう。

ところで、解説者は、偶然にも十数年前から、本書が提起する記紀神話と歴史叙述の關係に注目したことがある。本書著者の卓論に触発され、ここにあえて、『古事記』と『日本書紀』における、「神世」を冒頭に飾るという「エクリチュール」の具体的なプロセスについて、一仮説を呈し、本書における論議の統紹とさせて頂きたい。門閥政治が盛んだった六朝時代の中国では、氏族の歴史意識の高揚と、通史への全体的な把握という二つの意欲に突き動かされて、歴史書の作成にあたって、新たな規範が模索されていた。その中から現れた皇甫謐の『帝王世紀』という書物は、天地の開闢から人皇が出現する魏の咸熙二年(二六五年)に至るまでの二七二代にわたる歴史を記したものであり、「人間史の開闢の説明と帝紀とを統一することに成功した」ことで、「古典的な宇宙生成論と帝王統治の世紀が」「簡便に網羅的に与えられた」と高く評されている(戸川芳郎『漢代の学術と文化』研文出版、二〇〇二年)。ただ、この歴史書は佚書として長い間歴史家に忘れ去られ、『日本国見在書目録』にも著録のみ見られ、実物は残っていない。

しかし、興味深いことに、『帝王世紀』の残編より復元されたその内容は、『古事記』と多くの点で類似している。神話の部分を除き、人皇に関する各記事の構成は基本的に、(一)出自と人となり、(二)政治実績、(三)王統譜、(四)死去時の年

齡または在位期間、(五) 埋葬地、となっているが、『古事記』の各天皇にかんする記事も、ほぼこの五項目に対応する構成内容となっている。また、分量、表現、文法など細部にわたる類似も目立ち、とりわけ紀伝体でも編年体でもないその様式と『古事記』の類似が目惹く。

『帝王世紀』が取る様式は、現在知られる中国史の最古の歴史記録、紀元前四世紀に現れたとされる「葉書」と「牒」にまで遡ることができ、ともに「紀系諡之譜」——王者の系統を記述するもつとも原始的な形態とされている。それが『世本』、汲冢書『竹書紀年』、『漢紀』、『古史考』を経て、『帝王世紀』に至って、史書の一類型として完成を見せた。内藤湖南、戸川芳郎らにも指摘されたように、正史を尊ぶ中国の歴史書のなかで、『帝王世紀』は、讖緯思想に色濃く塗られた独自の宇宙観を人皇の歴史と結びつけることよって、朝廷の正統性を強調することに成功したのみならず、それ自体が六朝という時代を特徴づける重要な一政治現象でもあった。

では、『古事記』と『帝王世紀』の間に見られる諸々の類似点は、何を意味するものだろうか。ここに拙論の一部を引用しておく。

『古事記』の編纂事業は、歴史的な立場から神話伝承を含む種々雑多な帝紀、旧辞の整理を通して、新たな時代に相応しい帝王の系譜を作ることであったた

め、太安万侶にとって、新しい歴史叙述の方法を模索する第一歩として、そうした先行資料の点検や取捨や同時に、規範たるべき史書の選定によって執筆方針を決定することも、その編纂作業の重要な一環であったと想像される。『帝王世紀』という書物は、『初学記』や『芸文類聚』とともに、恐らく当時既に見える条件にあったのであり、我々が両文献の間に見る前掲の諸々の類似点を、『古事記』における『帝王世紀』受容の痕跡として認めるべきであろう。

また、こうした類例を通して、太安万侶の編纂方針——『古事記』をして「帝王日嗣」としての統一性を持たせる意向と使命感のようなものも強く感じられる。(中略)この事業で終始優先されていたのは、明らかに各代の皇統譜を漏れなく、一定の規範に則って記述することである。我々が『古事記』に見える執拗なまでの、同じパターンで繰り返し返えされる皇統譜こそ、太安万侶の目指した目標であり、到達点でもあろう。そして、そのような彼の仕事を成就させたのは、新たな歴史叙述を模索する史家として情熱のほか、『帝王世紀』という漢土伝来の書物もその参考書たるべく一役を買っていたのであろう。

(王小林『古事記と東アジアの神秘思想』汲古書院、二〇一八年)

ともかく、『帝王世紀』というユニークな歴史書に出会ったことをきつかけに、

『古事記』の編纂者が、中国史の圧倒的な「単一性」から脱出する道を見いだし、現在見られるような歴史叙述の様式を確立した可能性が考えられる。

繰り返すが、『古事記』の編纂者にとって、天地開闢より天皇の統治へと続くその皇統の正当性を強調するために、正史とまったく異なる原理と規範が必要とされていた。まさにそのような希求を満たすように、「家牒」と「世本」の流れを汲む『帝王世紀』が、編纂者の目に止まり、その編纂方針と様式が利用され、最終的に、現存する『古事記』の様式が成立したと考えられる。そして、八年後に編纂された『日本書紀』も、紀伝体という形を取りながら、『古事記』編纂の基本方針を默契として守り、現在見られる構成に仕上げられたと考えられよう。二つの歴史書は、いずれも国家の事業として企画されていただけに、相互に見られる様式の相違を、それぞれ対内宣伝と対外交流——この場合の対外とはあくまでも「天下システム」の中心である中国を指す——の政治方策によるものと理解すれば、疑問も氷解しよう。

以上はあくまでもひとつの仮説に過ぎないが、これをもって本書著者の「日本史のエクリチュール」という語に示唆される古代日本の歴史世界に繰り広げられていた激しくもスリルな知的ドラマへの想像力を、少しでも豊かなものにして頂ければ、冒頭に述べた「鮮やかな道しるべ」という本書への評語も、決して虚言でないことが理解されよう。

近年、時間というものの「単一性」を否定した物理学者は、目から鱗が落ちるような理論を提唱している。

時間は、場所が違えば異なるリズムを刻み、異なる進み方をする。この世界の事物には、さまざまなリズムの踊りが編み込まれている。踊るシヴァ神がこの世界を支えているのであれば、一万のシヴァ神がいるはずなのだ。ちょうどマティスの絵画のような、巨大な踊り手たちの集団が。

(カルロ・ロヴェッリ／富永星訳『時間は存在しない』NHK出版、二〇一九年)

本書がその序文において、蜜蜂の巣の二つの歴史という比喻を用いて表現しようとしたのも、まさに「異なるリズム」「異なる進み方」を持つ日本史の世界であり、数々の日本の歴史書を通して読者に開示しようとしたのも、古代東アジアを支配していた正史の呪縛から解放された、さまざまなリズムの踊りが編み込まれた歴史の世界にほかならない。この巨大な踊り手たちの集団によって織りなされる歴史図絵を前に、指針たる本書の、簡にして要を得た案内を手にすれば、異彩を放つ日本史に触れる知的な喜びは、すでに約束されている。

(おう・しょうりん／東西哲学研究所代表)

Sample

*本書は一九八七年六月に弘文堂から刊行されたものを底本にしています。

大隅和雄（おおすみ・かずお）

一九三二年、福岡県福岡市生まれ。一九五五年、東京大学文学部国史学科卒業。一九六一年、同大学院博士課程中退。一九六四年、北海道大学文学部助教授。一九七七年、東京女子大学文理学部教授。現在、東京女子大学名誉教授。

専攻は、思想史・文化史。『中世思想史への構想——歴史・文学・宗教』（名著刊行会、一九八四年）、『愚管抄を読む——中世日本の歴史観』（平凡社、一九八六年／講談社学術文庫、一九九九年）他、多数の著書・論文がある。

日本史のエクリチュール

二〇二四年六月七日 第一刷発行

著者 大隅和雄

発行者 大隅直人

発行所 さいはて社

住所 滋賀県草津市新浜町八番地一三（〒五二五〇〇六七）

電話 〇五〇―三五六一―七四五三

ファクス 〇五〇―三五八八―七四五三

ホームページ <https://saihatesha.com>

メールアドレス info@saihatesha.com

組版 T S スタジオ

印刷 共同印刷工業

製本 新生製本

Copyright ©2024 by Kazuo Ohsumi Printed in Japan

ISBN 978-4-9912486-4-1